

ローゼ・クラン台本_Story2

愛の戦棍

収録形式

フォルダ名 : rc_02_キャラクター名

ファイル名 : 台詞番号_02

収録形式 : 44100hz 16bit モノラル wav

台詞数

◆総台詞数 : 400

◆内訳

オルトヴィーン : 122

アンネローゼ : 42

ドロシア : 116

イヴリン : 113

男 : 7

番号	キャラ名	台詞	ト書き
Scene1			
人の行交う街中。花を売る少女が一人…… そこを通りかかるオルトヴィーンとアンネローゼ。			
001	ドロシア	お花いりませんか～？	花を売っている
002	オルトヴィーン	……	立ち止まる
003	アンネローゼ	兄さま？ どうなさったの？	一緒に立ち止まる
004	ドロシア	お花はいりませんか～？ お花、たくさん、ありますよ～	
突然、無言で花売りのほうへと歩き出すオルトヴィーン			
005	アンネローゼ	あ、ちょっと、兄さま！	オルトヴィーンを追いかける
006	オルトヴィーン	君	花売りに声をかける
007	ドロシア	は、はい！	声をかけられて吃驚
008	オルトヴィーン	とても綺麗な花たちだね ……薔薇はない？	
009	ドロシア	ば、バラですか！ は、はい、ちょっと待っててください……！	慌てて去っていく
010	アンネローゼ	兄さま、お花、買うの？	
011	オルトヴィーン	そうだね もし薔薇があるなら……	
012	ドロシア	お、お待たせしましたぁ！ あ、あの、一輪だけなら…一応赤いのがありますけど……で、でもまだ蕾で……	一輪の薔薇を差し出す
013	オルトヴィーン	へえ、それは良いや じゃあ、その薔薇を一輪ください	
014	ドロシア	あ……ありがとうございます！ じ、じゃあ……えーと、いくらだっけ、えーと、	買ってもらえるとは思っていなかったので動揺
015	オルトヴィーン	これで足りるかな？	金貨一枚を取り出し渡す
016	ドロシア	え…こ、こんなに？！ 金貨一枚なんて、そ、そんな、いくら薔薇でもこんなにもらうなんて悪いです、	動揺
017	オルトヴィーン	気にしないでいい 僕たちは薔薇が大好きだから、金貨一枚くらいの価値はあるのさ なんなら、もっと積んだって構わないよ	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
018	ドロシア	い、いえいえいえいえいえ！ とんでもないです！ あ、ありがたくいただきます……あ、あの、本当に、ありがとうございます……	アワアワしつつ
019	オルトヴィーン	良いんだよ。 それじゃあ、ありがとう。	去っていく二人……
020	ドロシア	……すごい、金貨なんて……もらったのはじめて……夜にだって貰ったことないのに……それに、とても…素敵な男の子だった……	感動、うっとりとして
021	イヴリン	『ローゼ・クラン-永久（とわ）の薔薇たち-』 ストーリー2（ツー） 「愛の戦棍（メイス）」	タイトルコール

Scene2

暖炉で火が爆ぜている。 オルトヴィーンとアンネローゼは新しい住居でゆっくりと購入したばかりの薔薇を眺めていた。

022	アンネローゼ	兄さま、いくらなんでも、蕾の薔薇に金貨一枚は多すぎたんじゃなくて？	
023	オルトヴィーン	別に、これから咲く薔薇も美しいからね もうすでに咲いている薔薇は枯れるのを待つだけだけれど、これから咲く薔薇は、咲くのを待つ楽しみがあつて良いものだよ	
024	アンネローゼ	ふうん……	
025	オルトヴィーン	さて、アンネ この街は気に入りそう？	
026	アンネローゼ	ええ、まあまあ。 思ったよりは綺麗だったし。 このお家も広くて素敵だし。 及第点ね	
027	オルトヴィーン	そうか 君が気に入ったのなら良かったよ	微笑む

Scene3

028	イヴリン	午後4時 そろそろ姉さんが帰ってくる時間だ。	語り
029	ドロシア	ただいまぁ～イヴ～♪	ドアを開け、上機嫌で帰ってきた
030	イヴリン	お帰り、ドロシア姉さん……どうしたの、なんか様子がおかしいよ	姉の様子を訝しむ
031	イヴリン	今日の姉さんは、どこことなくおかしい。 頬がほんのり赤く染まっているし、歩き方もなんだかふわふわして今にも踊り出しそうだ。俺がおかしいよ、と告げても怒る様子もなく、ウヒヒ、という形容が似合いすぎる笑い方をして、コートのポケットに手を突っ込んだ。	語り
032	ドロシア	見てよお、これ！	上機嫌で金貨を取り出す
033	イヴリン	え…金貨？ どうしたのこれ、まさか盗んだとかじゃないだろうね？	驚き
034	ドロシア	ちょっとお、いくらなんでも失礼すぎなあい？ これは……とても素敵な方から…いただいたの……	後半、うっとりとして
035	イヴリン	素敵な方？	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
036	ドロシア	そう……金色の巻き毛がとても素敵で……それから透き通るようなブルーの瞳をしてたわ……まだ蕾の薔薇の花を買ってくれて…それでこの金貨をくれたの……	夢を見ているかのようにうっとり
037	イヴリン	蕾の薔薇一輪に？ 確かに薔薇は高価な花だけど、だからって金貨一枚も？	怪しむ
038	ドロシア	そうなのよお～ ほんとうに素敵な人だった…すごくきれいな顔立ちをしてたわあ……そうね、お人形さんみたいだった！一緒に女の子もいたんだけど、その子もすごく可愛くて……あの子のプラチナの髪も綺麗だったわあ……	夢見心地で
039	イヴリン	……姉さんはすっかり夢見心地。 姉さんをこんな風にしたってことは、よっぽど「素敵」な人だったんだろうけど…いくらなんでも、金貨一枚も薔薇の花一輪、それも路上の花売りの女に渡すような男、ちょっと変だと思うんだけど。	語り
040	ドロシア	はあ～…また会えないかなあ～……たくさん薔薇、仕入れたらまた来てくれないかな……	
041	イヴリン	……こうなった姉さんには、多分もう俺の声は届かないだろう。 俺は溜息を吐いて、とりあえずお茶でも淹れてあげようと席をたった。	語り
夜がくる。			
042	イヴリン	午後 10 時 姉さんが、そろそろ家を出る時間	語り
043	ドロシア	それじゃあ、行ってくるわね	家を出て行く あまり乗り気ではなさそう
044	イヴリン	そう言って家を出て行く姉さんは、昼間とは打って変わった姿をしている。コートで隠してはいるけれど、俺はとっくの昔に気づいているんだからね。たいして大きくもない胸を見せびらかすような胸元の開いたドレスを着て、姉さんなりに濃い化粧をして夜の街に出て行く。 ……何してるかなんて、姉さんがどれだけ隠したってわかるよ、俺だって。	語り
045	イヴリン	……そこまでしなくたって、いいのに。	呟き
046	イヴリン	俺とドロシア姉さんは、所謂「戦争孤児」ってやつ。少し前の戦争で両親が死んで、俺たちだけが残された。 他に親戚もなく……というより、いたけど、決して俺たちを引き取れるような余裕もなく、また、そんなつもりもないような奴らばかり。 だから俺たちは、俺たち二人だけで生きていくことにした。 姉さんが「花」を売っているのはそのため。 俺も何かしたいけど、生憎、戦争で脚を怪我してしまって碌に働けやしない。 俺は足手まといでしかない。 ……俺がもっとしっかり働けさえすれば、姉さんは夜にまで「花」を売らずに済んだかもしれないのに。	語り
047	イヴリン	いいよな……一輪の薔薇に金貨一枚あっさり出せるような男は……	ぼやき
048	イヴリン	姉さんが大事そうに引き出しにしまいこんでいた金貨を思い出して、思わずため息が漏れる。 一体どんな男なんだろう……明日（あした）こっそり、姉さんが花を売っているところに、見に行ってみようか……	語り
Scene4			
049	イヴリン	翌朝、午前 6 時。 姉さんが花のたくさん入ったカゴを持って家を出る	語り
050	ドロシア	じゃあ、行ってくるねえ～♪	上機嫌で家を出る
051	イヴリン	どことなく機嫌がいい…というか、ワクワクしたような表情をしてる。例の男に会えるのをまだ夢見てるんだ。絶対会えるなんて保証もないのに。 無理して、カゴにはたくさんの薔薇を詰め込んでいた。多分あの薔薇のぶん「稼いで」きたんだろう。昨夜は帰りがいつもより遅かった。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
052	イヴリン	……	扉が閉まり、暫く待つ
053	イヴリン	姉さんが出かけて、暫くしてから。 俺は薄っぺらいコートを羽織って、家を出た……	語り
朝。人の行交う街中。花を売るドロシア			
054	ドロシア	お花はいりませんかぁ～綺麗なお花、たくさんありますよお～！ 今日は薔薇の花がたくさん、ありますよお～！！	呼び込み中、薔薇の花～を少し強調して
そこへ歩いてくる人影が……			
055	ドロシア	あ……！	嬉しさとドキドキ
056	オルトヴィーン	やあ、君	
057	ドロシア	き、昨日の！ あ、ああ、昨日は本当にありがとうございました！ …ほんとにまた会えるなんて夢みたい！ どうしよう！	後半、独り言
058	オルトヴィーン	ふふ ……おや、今日は随分とたくさんの薔薇があるんだね	
059	ドロシア	は、はい、はい！ 今日はたくさん薔薇、仕入れてみました！ よ、よかったら、あの…いかがです……？ あ、ああああ、金貨が欲しいとかじゃなくて、あの、ほんとうに、純粋に、今日は珍しく薔薇がたくさん入っただけだから、あの、えっと……	しどろもどろに
060	オルトヴィーン	あはは、もしかして僕のために仕入れてくれたのかな	
061	ドロシア	えっ！	凶星を突かれてドキっとする
062	オルトヴィーン	…君、名前は？	可愛らしい子だなあ、と思いつつ尋ねる
063	ドロシア	えっえっ あ、ああ、あたしですか、あたし、……あたし、ドロシアといいます ドロシア・エレット……	ドキドキ
064	オルトヴィーン	そうか、よろしく、ドロシア。 僕はオルトヴィーン 暫くこの街にいる予定なんだ。 良かったら、この街について色々教えてくれないかな	
065	ドロシア	あ、ああ、はい！ あたしで良ければ……っ！	嬉しい
そんな二人を見つめる影が一つ……			
066	イヴリン	……あれが姉さんが夢中になってしまった男か。 確かに、綺麗な顔立ちをしてる。 黄金（おうごん）の髪に青い瞳。ずいぶんと高級そうな服を着て、ニヤニヤ人の好きそうな笑みを浮かべてる。	語り
067	オルトヴィーン	ところで……あそこで僕たちを見ている子は、君の知り合い？	ちらりとイヴリンのほうに目を向ける
068	イヴリン	！ 気づかれた？！	語り、驚き
069	ドロシア	えっ？ ……あっ！ イヴ！ 何してるの？！	びっくり、イヴリンに駆け寄る

番号	キャラ名	台詞	ト書き
070	イヴリン	……別に……	バツが悪い
071	ドロシア	もう、もう、駄目じゃない！ 杖も持たずに出歩いて、足がもっと悪くなったらどうするの！	
072	イヴリン	……ごめん	バツが悪い
073	オルトヴィーン	大丈夫？	近づいてくる
074	ドロシア	えっあっ、は、はい、オルトヴィーンさん！ えと、この子はあたしの弟のイヴリンです。 イヴ、彼が昨日お話しした人！ オルトヴィーンさんっていうんだって！ ほら、「よろしくお願いします」は？	
075	イヴリン	……よろしくおねがいます、……イヴリンです……	不愛想に
076	オルトヴィーン	ああ、よろしく、イヴリン。 ……君は足が悪いの？	
077	ドロシア	そ、そうなんです えと……数年前まで戦争してたのは知ってます…よね？ その時の戦争で……	
078	オルトヴィーン	戦争か……	
079	ドロシア	はい、それであたしたちの両親も死んじゃって、今はあたしとイヴの二人だけで暮らしてます	
080	オルトヴィーン	なるほど、それで君はああやって、道端で花を売っているわけだ。 ……大変だっただろう。	同情
081	ドロシア	確かに大変ですけど、でも……あたしがイヴを守らないといけないから！ だから、大変だとか思ってる暇はないんです！ 大事な弟を…家族を守るのは当然のことだもの！	胸を張って
082	イヴリン	姉さん……	嬉しさと悲しさと悔しさ
083	オルトヴィーン	そうか…… 君の気持ち、よく分かる。 僕にも守らなきゃいけない大切な子がいるから。	優しく
084	ドロシア	えっ そ、そうなんですか…… ……あっ もしかして昨日一緒にいらしたお嬢さんですか？	ちょっと落胆して（彼女かと思っている）
085	オルトヴィーン	うん アンネと言ってね。僕の可愛い……まあ、妹みたいなもの、かな。	
086	ドロシア	妹……！ 妹さんもすっごくすっごく綺麗で可愛らしい人でしたよね！ あ、オルトヴィーンさんも、あの、すごくおきれいな人ですけど、あの……	（彼女じゃなくて）ちょっと安心 段々照れてくる
087	イヴリン	オルトヴィーンの言葉に、姉さんは一喜一憂してころころと声色が変わる。……正直ちょっと面白い。	語り
088	ドロシア	あ、あうう、あたしったら、変なことばかり……ほんと、すみません、あの、えと……	恥ずかしくなってきた
089	オルトヴィーン	ふふふ、構わないさ、容姿を褒められるのは嬉しいことだよ、とてもね。ああ、そうだ、ドロシア。そのたくさんの薔薇、もらえるだけもらってもいい？	
090	ドロシア	!!! は、はい！ もちろん、もちろんです！！ えっと、じゃあお代金は、えーと……	慌てている

番号	キャラ名	台詞	ト書き
091	オルトヴィーン	これぐらいでどうかな？	金貨を取り出す
092	イヴリン	そう言ってオルトヴィーンが差し出したのは、なんと金貨五枚 ……こいつ、一体どこの金持ちのぼんぼんだ？ こんなあっさり金貨5枚も出せるなんて、よっぽどの金持ちじゃないとさすがに無理だろう。 何者なんだ？	語り
093	ドロシア	ごごごごご、五枚もですか?! さすがにこんなには…	驚愕
094	オルトヴィーン	街を案内してもらってからその分も一緒に、だと思って。あとは褒めてくれたお礼と、弟さんを紹介してくれたお礼と、それから君たちのことについて教えてくれたお礼も含めてってことで	
095	ドロシア	で、でも、そんな……	躊躇う
096	イヴリン	……。もらっときなよ姉さん	
097	ドロシア	イ、イヴウ!	何言ってんの! って感じで
098	イヴリン	折角くれるっていうんだからさ。 良いんだよね、オルトヴィーン?	
099	オルトヴィーン	ああ、当然だよ。 是非、貰っておくれ	
100	ドロシア	そ、そこまで言うなら……ありがたく、いただきます、けど…… イ、イヴ、もっとちゃんとした口をききなさいよオ	まだちょっと躊躇っている、イヴリンを窘める
101	イヴリン	いいじゃん、俺と彼、年が近そうだし	
102	ドロシア	そういう問題じゃないでしょお! 初対面だし、それにこの方はあたしたちなんかと全然違う……お貴族様だし……	
103	オルトヴィーン	……あははは! 僕は別にそんな、大それた身分じゃないよ。 だからドロシア、君もイヴリンのように気楽に話してよ	
104	ドロシア	で、でもお……	
105	イヴリン	姉さん、折角そう言ってもらってるんだし、そうすればいいじゃん	
106	ドロシア	も、もお、イヴったらあ……じ、じゃあ、えーと、えと……オルトヴィーンさ…じゃなくて、オルトヴィーン……うう……	遠慮と照れ
107	オルトヴィーン	ふふふ、「オルト」でいいよ。 それでドロシア、何時（なんじ）からなら時間が空いてる？	
108	ドロシア	は、はい! じゃなかった、う、うん……えっと、午後4時から……午後10時までの間なら大丈夫です…じゃない、大丈夫、よ、	
109	オルトヴィーン	そうか。 じゃあ、午後4時になったらまた来るよ。 薔薇、ありがとう。	去っていく
110	イヴリン	……思ったよりは気さくなヤツだった。 妙に羽振りがいいのは気にかかるし、ちょっとキザっぽいところもあるけど、少なくとも、姉さんを危ない目に合わせそうな感じではない……とは、思った。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
Scene5			
111	オルトヴィーン	ただいま、アンネ	自宅に戻って来る
112	アンネローゼ	あ、お帰りなさい兄さま！ ……あら、今日はたくさんの薔薇！	嬉しそうに
113	オルトヴィーン	うん、ドロシア……昨日の花売りの女の人が、たくさん薔薇を仕入れてくれたらしいから、たくさんもらってきたんだ	薔薇をアンネローゼに差し出す
114	アンネローゼ	素敵！ やっぱ薔薇は咲いているほうがいいわ 鮮やかで見ている楽しいもの	薔薇を受け取り抱きしめる
115	オルトヴィーン	そう	
116	アンネローゼ	ねえ兄さま、このあとはもうずっと、お家にいてくださるでしょう？ 私、退屈で仕方がないのよ。	オルトヴィーンに甘えるように擦り寄りながら
117	オルトヴィーン	ああ、4時になったらまた出かけるけど、それまでなら	アンネローゼの頭を撫でてあげる
118	アンネローゼ	ええ～またお出かけしてしまうの？ どこへ行くの？	不服
119	オルトヴィーン	ドロシアに街を案内してもらうんだ	
120	アンネローゼ	……兄さま、もしかしてあの花売りが『お気に入り』になったの？	勘づく
121	オルトヴィーン	さあて、どうだろう。 とにかく、4時になったら出かけてくるよ。 お前はお家で待っておいで	
122	アンネローゼ	ええ！ アンネも行きたい！	
123	オルトヴィーン	駄目だよ、午後からは少し天気が悪くなりそうなんだ もし途中で倒れたりしたらどうする？	
124	アンネローゼ	……もう、兄さまって、本当に『お気に入り』ができると、その人の事ばかりになっちゃうんだから……	呆れ
125	オルトヴィーン	ふふふ…… ごめんね、帰ってきたらちゃんと相手をしてあげるから	
126	アンネローゼ	絶対よ、約束ですからね！	
127	オルトヴィーン	はいはい	
Scene6			
128	ドロシア	ああ～～どうしよう、どうしよう～～～！！	慌てている
129	イヴリン	姉さん落ち着いて	姉の様子がちょっと面白い

番号	キャラ名	台詞	ト書き
130	ドロシア	どうせならもっとちゃんとした服を着てくれれば良かったあ〜！ こんなみすぼらしい恰好でオルトヴィーンさんと並ぶなんてえ……	慌てている
131	イヴリン	別に服装なんて気にしないでしょ、あの人	
132	ドロシア	でもでもお〜！	
133	イヴリン	……もう諦めなつて。 ほら、もうすぐ4時の鐘が鳴る。 着替えに戻るなんて無理だからね	
134	ドロシア	ううう〜……	
4時を告げる鐘が街に響き渡る			
135	イヴリン	第一、姉さんがもってる「ちゃんとした服」なんて、夜に着ていくドレスだけじゃないか。……とは、流石に言えなかった。俺は姉さんに、「何も知らないフリ」をしなくちゃいけない。 それを、姉さんが望む限り。	語り
遠雷が聴こえ始める……			
136	イヴリン	なんだか天気が悪くなってきたね	空を見上げて
137	ドロシア	ほんと お昼間はあんなに晴れてたのに……もう、やだなあ、折角オルトヴィーンさんと…	残念そうに
138	イヴリン	デートできるって？	からかう
139	ドロシア	デ！ デデデ、デートだなんて！ そんな、ちがうちがう、街を案内するの〜！	慌てて
140	イヴリン	はいはい。 ……あ、ほら、来たよ……	遠くから歩いてくる人影を目にとめる
141	オルトヴィーン	やあ、ドロシア、イヴリン	やってくる
142	ドロシア	こ、こここんにちは！ オルトヴィーンさん！ ……じゃなくて、オルト！	ドキドキ
143	オルトヴィーン	仕事が終わってすぐの疲れているときに、悪いね	
144	ドロシア	い、いえいえいえ、全然！ 全然大丈夫です！ じゃなくて、大丈夫！よ！ そ、それで街を案内すればいいのよね？	
145	オルトヴィーン	うん 是非お願いしたいな	
146	ドロシア	じ、じゃあ、行きましょう！ え、えーと、まずはどこから……	
147	オルトヴィーン	そうだね……とりあえず、美味しいお茶のある店なんかを教えてくれると嬉しいな	
148	ドロシア	は、はい！ それならとてもいいところがあります！ じゃなくて、あるから！ 行きましょう！	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
149	イヴリン	姉さんは緊張気味に、でも完全に浮かれた足取りで歩き出す。 オルトヴィーンはそんな姉さんの背中を微笑ましそうに暫く眺めてから、後を追う。 俺もそんな二人の後（うしろ）を歩き出した。	語り 遠雷が鳴る……
150	イヴリン	それにしても……ほんと、天気が良くないな……折角のデートなのに、残念だね、姉さん。	眩き

Scene7

町はずれの湖畔を歩いていると、雨が降り出した

151	イヴリン	思った通り、雨が降り出した。 俺たちはどこか雨を凌げる場所を探したけれど、そこは運悪く町はずれにある湖畔。自然はたくさんあるけれど、屋根なんてものは存在しない。 強いて言えば木の下に隠れる、という手があるけれど、この雨量を凌ぐのは流石に無理そうだ。 しかも最悪なことに、雨のせいか、足の傷が痛み始めた。	語り
152	イヴリン	……い、たた……	足を押さえて座り込む
153	オルトヴィーン	どうしたんだい、イヴリン…？	心配
154	イヴリン	…べ、べつに……	痛むが、気遣われたくない
155	ドロシア	！ もしかして足が痛むの？！ きっと雨の所為ね、早くどこか休めるところを探さなきゃ！ えーと、どこか……（暫く探す） ……あ、見て！ あそこに古そうだけど小屋がある！ ひとまずあそこに行こう！	勘づく。 暫くあたりを見渡し、小屋を見つけた

三人、小屋へと向かう

小屋の中に入ると、雷の音が強くなりはじめ、雨も一層強まってきた。 三人は小屋にあったタオルで体を拭いている

156	オルトヴィーン	なんとか雨を凌げる場所を見つけられて良かった。 タオルもあって助かったね	
157	ドロシア	ええ、ほんとうに…… イヴ、大丈夫？	イヴリンが心配
158	イヴリン	別に平気だって	ぶっきらぼうに（迷惑かけて申し訳ない）
159	オルトヴィーン	……この傷は、例の戦争で？	
160	ドロシア	ええ…… 逃げてる途中で、銃弾が当たっちゃったの……それで……血がたくさんでて……	あの時の恐怖を思い出して涙ぐむ
161	オルトヴィーン	……ドロシア、	涙ぐんだドロシアを抱き寄せる
162	イヴリン	あの時のことを思い出したのだろう、姉さんの目が微かに潤んだ。その様子を見て、オルトヴィーンが姉さんをそっと抱き寄せる。 ……あれ、なんかいい雰囲気じゃん。	語り
163	ドロシア	あ、あ、駄目ですよオルトヴィーンさん、濡れちゃう、	慌てて
164	オルトヴィーン	大丈夫 僕もとっくにびしょ濡れだから	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
165	ドロシア	で、でも、でも……	ドキドキしている
166	イヴリン	……ちょっと、俺がいること忘れてない？	苦笑しつつ
167	イヴリン	さすがに、目の前でロマンスされるのは居心地が悪いからやめてほしい。 姉さんの顔が薔薇よりも真っ赤に染まって、慌ててオルトヴィーンから離れた。	語り
168	ドロシア	あ、あああ！ え、えと、あし、足は大丈夫？！ 大丈夫なのよね？！	慌てている
169	イヴリン	うん、大丈夫だって	姉さん面白いな、と思いつつ
170	オルトヴィーン	でも一応見せてごらん……だいが歩いたし、かなり負担をかけてしまっているかもしれない……	しゃがみ込み、イヴリンの足に触れる
171	イヴリン	そう言って、オルトヴィーンは俺の足元にしゃがみ込むと、足にそっと触れた。 ……ひどく冷たい手だった。雨でぬれた所為だろうか。まるで氷のような冷たさだ。 するりとオルトヴィーンの指が俺の足を撫でる。背筋にぞくりと甘美な感覚が走ったのは、多分、彼の指が冷たいせいだ……	語り
172	オルトヴィーン	ああ、これが銃弾の痕……痛々しいね 傷が開いたりはしていないようだけど……ずいぶんと歩かせて悪かったね、イヴリン	悲しそうに
173	ドロシア	そうね…あたしも浮かれちゃって、イヴの足の事、全然考えられなかった……ごめんなさい……	しょんぼりして
174	イヴリン	別に……俺が勝手についていただけだから むしろ姉さんの楽しみを邪魔してごめん	
175	オルトヴィーン	……君たちは互いを思いやる、とてもいい姉弟（きょうだい）だね。素敵だ	立ち上がる。優しく言う。
176	ドロシア	そ、そそ、そんな……ただ、父さんと母さんの代わりになんとかしなくちゃって精一杯で……	アワアワ
177	オルトヴィーン	謙遜しなくていい 僕とアンネ…妹だって似たようなものでね 互いがとても大事なんだ。そうだろう？	
178	ドロシア	そ、それは…… ……その通りです。あたしにとって、イヴは最後の肉親…一番大切なものなんです。 だからこの子のためならなんだってできるわ	後半、胸を張って
179	イヴリン	姉さん……	
180	オルトヴィーン	……君は本当に素敵な人だね、ドロシア	
181	ドロシア	え・・・！ そ、そんな、あた、あたしなんて、	慌てる、照れている
182	オルトヴィーン	ううん、本当に素敵だよ。 そうやって胸を張って弟を大切だと言えるなんて。 ……ふふ、アンネに会いたくなってきたな。 ああ、丁度雨も止んだね。 ……イヴリン、足のほうはどう？	窓の方を見る 雨が止んでいる
183	イヴリン	別に平気だって言ってるだろ	ぶっきらぼうに（ちょっと照れている）
184	オルトヴィーン	そうか、なら良かった	安堵して

番号	キャラ名	台詞	ト書き
185	ドロシア	……あっ！ い、今何時！？ もしかして結構遅い時間になってしまってるんじゃあ…？！	焦っている
186	オルトヴィーン	落ち着いてドロシア さすがに 10 時にはなっていないよ でも、そうだね、思ったより遅くなってしまったかもしれない…… アンネが心配だな…早く帰ってあげないと……	後半、呟くように
187	ドロシア	そ、そうよね！！ は、はやく帰らないと……	慌てつつ、でも少し残念そうに
188	イヴリン	姉さんの声が残念そうに沈む。 本当に分かりやすい。 ……正直、今日はこのまま帰らなくていいんじゃないかなとすら思う。 そうすれば、姉さんは夜に「花」を売らずに済むから。	語り
189	オルトヴィーン	ドロシア	
190	ドロシア	はっはい！	
191	オルトヴィーン	今度は晴れている日に、是非一緒にあの湖を歩こう	
192	ドロシア	……はい！ うん、そうね！ ぜひ！ ぜったい！	嬉しい
193	オルトヴィーン	ふふ じゃあ、今日はこれで……また明日、ドロシア、イヴリン。	小屋から出て行くオルトヴィーン
194	ドロシア	……帰ろっか、イヴ	
195	イヴリン	そうだね、姉さん	立ち上がる
196	ドロシア	……ね、イヴ。 あたし、今……すっごく幸せ、かも……	うっとりとして
197	イヴリン	うん、分かってるよ	優しく

Scene8

198	オルトヴィーン	アンネ	アンネの部屋に入る
199	アンネローゼ	兄さまの馬鹿	寝返りを打ち、オルトヴィーンに背を向ける
200	オルトヴィーン	ごめんねアンネ、雨の中一人にしてしまって	アンネのベッドに近づきながら
201	アンネローゼ	ふうんだ、兄さまは私なんかより、花売りの方が大事なの、分かっているのよ	拗ねている
202	オルトヴィーン	もう、アンネ……本当に悪かったよ 帰るに帰れなかったんだ。 僕の一番は君だよ、分かっているだろう？	
203	アンネローゼ	さあ、どうかしら？ 兄さまはすぐ『お気に入り』を作って、夢中になっちゃうから	拗ねている
204	オルトヴィーン	アンネ	苦笑しつつ

番号	キャラ名	台詞	ト書き
205	アンネローゼ	私、今日はもう寝るの 明日も寝ているの だから兄さまは、好きなだけお花を買ってあげればいいわ。	拗ねている
206	オルトヴィーン	……ふう、仕方のない子だね、アンネ	諦めてアンネローゼに背を向ける
207	オルトヴィーン	おやすみ、アンネ 愛してるよ	部屋を出て行く
208	アンネローゼ	……兄さまの「愛してる」は、残酷なのよ……	呆れ気味に

Scene9

209	イヴリン	午後 10 時。 姉さんはいつものように服を着替えて、コートを羽織って、そして家を出る寸前になって、	語り
210	ドロシア	行きたくない	
211	イヴリン	はじめて、そんなことを言った。	語り
212	イヴリン	……じゃあ、行かなきゃいいじゃん	
213	ドロシア	でも、行かなきゃ	悲しそうに
214	イヴリン	行きたくないんだろ だったら一日くらい休めば	
215	ドロシア	でもお……	躊躇い
216	イヴリン	今日オルトヴィーンにあれだけ金貨をもらったんだし、一日どころか一週間くらい夜に働きに出なくても平気でしょ	
217	ドロシア	……	躊躇い
218	イヴリン	ねえ、姉さん。 本当に、別に無理に行く必要なんてないんだよ 俺の為っていうなら余計にさ。	
219	ドロシア	でも、でも、イヴ……	
220	イヴリン	姉さん、今日は休もう。 今日はさ、オルトヴィーンのことを考えてこのまま眠ろうよ	
221	ドロシア	……………オルトヴィーンさん……	オルトヴィーンを思い出しうっとりとする
222	イヴリン	姉さんの声が、少しだけ熱を帯びる。……姉さんはすっかり、オルトヴィーンに夢中だ。 まあ、無理もないか。 あんな身ざれいな男なんて、姉さん今まで相手にすらされてこなかっただろうし。 ……下品な金持ち連中となら、いくらでも会ってきただろうけど	語り
223	ドロシア	……そうね、今日一日くらい、良いよね	腹を決めた

番号	キャラ名	台詞	ト書き
224	イヴリン	そうそう、今日オルトヴィーンに抱きしめられたことを思い返しながらゆっくり寝なよ	からかう
225	ドロシア	!!!! も、もう、イヴウ〜!!!!	照れている
226	イヴリン	あはははは!	楽しい

Scene10

227	オルトヴィーン	おはよう、アンネ	アンネの部屋へ行く
228	アンネローゼ	……	敢えて何も答えない
229	オルトヴィーン	おや、まだ臍を曲げているの?	苦笑しつつ
230	アンネローゼ	……今日もあの花売りに会いに行くの?	
231	オルトヴィーン	そうだね……昨日の雨で風邪を引いていないかも気になるし、それから、初めて会った日に彼女から買った薔薇が少しずつ開いてきたから、その報告もしたいし。	
232	アンネローゼ	ふうん…… 本当に気に入ってらしゃるのね、その子のこと。	
233	オルトヴィーン	……まあ、そうだね	
234	アンネローゼ	どうするの? 「お食事にお誘い」するの?	オルトヴィーンのほうに体を向ける
235	オルトヴィーン	……さて、どうするか……。 ……。 ……とにかく、行ってくるよ アンネもくる?	少し悩む
236	アンネローゼ	昨夜言ったでしょう? 私、今日は寝ているの	再びオルトヴィーンに背を向ける
237	オルトヴィーン	はいはい ……それじゃあ、行ってくるね。	部屋を出て行く
238	アンネローゼ	兄さま、あまりお食事に乗り気じゃなさそうね……それとも、食するほどのご興味はないのかしら?	後半、少し嬉しさを滲ませて

Scene11

239	ドロシア	お花、たくさんありますよ～～	街中で呼び込みをするドロシア
240	オルトヴィーン	ドロシア	歩み寄ってくるオルトヴィーン
241	ドロシア	!! オルトヴィーンさ……オルト!	驚き、喜び
242	オルトヴィーン	昨日は災難だったね イヴリンも君も、風邪を引いていないかと思って心配していたんだ	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
243	ドロシア	あ、あああ、そんな、ご心配して頂いて……！ あ、あの、あたしもイヴもどっちもすっごく元気です！ じゃなくて、元気！	アワアワして、でも嬉しい
244	オルトヴィーン	そうか、それは良かった。 ……今日はいつもより顔色が良い気がする。 何か良い事でもあった？	
245	ドロシア	ええっ！？ えっ え、っと…あの、オルトと一緒に……昨日、過ごせたのが……嬉しくて…… ああああっ あたし何言ってるんだろ、ごめんなさいっ あの、でもほんとに、昨日は雨が降ったけど楽しかった！	後半に行くにつれ声が小さくなっていく
246	オルトヴィーン	ふふ、それは良かった。 僕も楽しかったよ。イヴリンにも伝えておいておくれ	
247	ドロシア	は、はい！	嬉しい
248	オルトヴィーン	ああ、そうだ、それから……初めて会った日に君が売ってくれた薔薇、少しだけど花が開いたんだ。 あと数日もすれば完全に開くと思う。	
249	ドロシア	ほんとですか！ わあ、嬉しい……大事にお世話してくれたんですね！	嬉しい
250	オルトヴィーン	ふふ、僕は美しい薔薇が咲いている姿も好きだけど、咲くまでの工程を見ているのも好きなんだ	
251	ドロシア	あっ わかる、わかります！ お花って、咲くまでのワクワクする感じも楽しいですよ！	テンションあがる
252	オルトヴィーン	うん ……薔薇が咲いたら、君にプレゼントするよ	
253	ドロシア	えっ でも、でもあれはオルトに売ったものだし、	驚き、躊躇い
254	オルトヴィーン	そうだね 僕が君から買ったものだ だからそれを僕がどうしようと、僕の勝手じゃないかな？	
255	ドロシア	あう……確かに、そうですけど、でも……良いんですか？	
256	オルトヴィーン	うん。 君に貰ってほしい。 君はととても、美しい薔薇の似合う人だと思うから。	
257	ドロシア	！！！！！！	物凄く照れる
258	オルトヴィーン	ふふ、薔薇みたいに顔が真っ赤だ。 ドロシア、	ドロシアの頬に手を触れる
259	ドロシア	あっ……	ドキっとする
260	オルトヴィーン	ふふふ、頬が熱い。	
261	ドロシア	い、いいい、いえ、そんな、そんな、 でも、でも、あたし、あたし、薔薇みたいな綺麗な花が似合う女なんかじゃない……	後半、少し悲しげに
262	オルトヴィーン	そんなことないよ 君のような素敵な女性にこそ、薔薇は似合うんだ だから必ず、プレゼントするよ 楽しみにしておいて	
263	ドロシア	あ、ありがとう、オルト……	嬉しさと悲しさで複雑

番号	キャラ名	台詞	ト書き
264	オルトヴィーン	それじゃあ、僕はこれで…… 今日妹の機嫌が悪くてね、お守をしないとイケないんだ、悪いね	
265	ドロシア	い、いい、いえ！ 来てもらえただけで、あたし、すごくうれしい…から……	照れている
266	オルトヴィーン	ふふふ、それじゃあ、また明日ね	去っていく
267	ドロシア	は、はい！	
268	ドロシア	……すごく冷たい手だった、けど……それだけあたしのほっぺが熱かったってことかも？！ や、やだ、恥ずかしい…… ……薔薇の似合う女性、か……本当にあたし、そんな綺麗な女じゃ、ないんだけどな……	「花売り」をしている自分を嫌悪しているドロシア

Scene12

269	ドロシア	……イヴはああ言ってくれたけど……でもやっぱり、休んでるわけにはいかないのよね…… ……薔薇の似合う女に、なれたらいいのになあ……	夜の街を一人歩くドロシア…… 後半、悲しげにつぶやく
270	オルトヴィーン	あれ、ドロシア？	
271	ドロシア	えっ	驚き、立ち止まる
272	オルトヴィーン	……やあ、ドロシア。 こんな時間に会うなんて。 ああ、そうか、夜 10 時から何か予定があるんだって、前に言っていたね	驚き
273	ドロシア	オ、オルト……なんでここに……	動揺
274	オルトヴィーン	少し夜の散歩をね。 アンネがどうしても、と せがむものだから。	
275	アンネローゼ	ふふふ、お久しぶりね。 花売りのおねえさん？	オルトヴィーンの腕に抱き付きながら
276	ドロシア	あ、こ、こんばんは……	動揺
277	オルトヴィーン	それにしても、女性が一人でこんな暗い中を歩くのは危険だよ 良かったら一緒に……	
278	ドロシア	い、いいい、いえ！ だいじょぶ！ 大丈夫だから！	慌てて駆け出す
279	オルトヴィーン	あ、ドロシア！	
280	アンネローゼ	あとを追いかけたら、兄さま？	少し楽しんでいる
281	オルトヴィーン	そうだね 行こうか、アンネ	
282	アンネローゼ	ええ。	歩き出す二人……
283	ドロシア	な、なんで、なんで……なんでこの時間にオルトヴィーンさんに……っ！ やだ、やだ見られたくない…夜だけは、嫌…っ！！	必死で逃げるように走り抜けるドロシア……

番号	キャラ名	台詞	ト書き
Scene13			
284	イヴリン	午後 10 時。 姉さんは結局一日だけ休んで、また夜の「花売り」に行ってしまった。 ……一週間どころか、一カ月だって余裕で暮らせるくらいのお金はもらったのに、どうして…… 実はあの仕事が好きとか？ そんなわけないよな だって行きたくない、って言ってたし。 ……連れ戻せないだろうか。	語り
285	イヴリン	今ならまだそう遠くまでは行ってないだろうし……何か適当な理由を見繕って連れ戻そう	立ち上がり、家を出るイヴリン
Scene14			
286	オルトヴィーン	……ドロシア、ずいぶんと足が速いな 一体どこへ行ったんだろう	ドロシアを探すオルトヴィーンとアンネローゼ
287	アンネローゼ	すごい勢いで逃げていったものね。 まるで兄さまに見られなくなかったみたい。	楽しそうに
288	オルトヴィーン	どうして？	
289	アンネローゼ	さあ、どうしてかしら？	※アンネはドロシアの仕事に気づいています
290	オルトヴィーン	失礼、	歩いていると、男とぶつかる
291	男	ああ？ 痛えな…… ……あ？ その隣にいる女、なかなか綺麗な顔してるじゃねえか……	酔っばらっている男、アンネローゼの手を掴む
292	アンネローゼ	あら	
293	オルトヴィーン	……	男をじっと見る
294	男	おい、ぶつかったお詫びにこの女、一晚貸せよ……いつも立ちんぼしてるヤツが昨日も今日もいなくて退屈してたんだ……あの女よりよっぽど上玉だし 丁度いい	ニヤニヤしながら
295	オルトヴィーン	……手を離せ	静かな怒り
296	男	あ？	
297	オルトヴィーン	手を離さないと……	男の手を掴む
298	男	ああん？ てめえみたいなひよろいガキに何ができるってんだあ？ 強がってねえでさっさと……	
299	オルトヴィーン	離せ、と言ってるんだ	オルトヴィーンの瞳が青く光る……
300	男	あ………？	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
Scene15			
301	イヴリン	俺は、見た。 姉さんを探して、暗い道をさ迷い歩いているときに。	語り
302	男	あっ……あああ……あ……	苦しむ
303	オルトヴィーン	汚い手で、僕の美しい薔薇に触れるから、こうなるんだよ	冷淡に
304	男	う…ぐ、………が……	倒れる男
305	イヴリン	オルトヴィーンの足元に、まるで全身からすべての血を抜かれたみたいに干からびた男が転がった。 一瞬の事で何が起こったのか、俺にははっきり分からなかった。 でも、……オルトヴィーンあの青い目が、ほのかに光を帯びているように見えるのは、多分、気のせいじゃない……	語り
306	アンネローゼ	あーあ、兄さまを怒らせるから。	楽しそうに
307	オルトヴィーン	まったく…僕の血が穢れる	心底嫌そうに
308	アンネローゼ	心配なら、私の血をあげましょうか？ 浄化してさしあげる	オルトヴィーンの首筋に手を触れる
309	オルトヴィーン	ああ、それもいいかもね……でも君はほかの仲間よりも血が少ないから……もらうのは気が引けるな	その手に自分の手を重ねる
310	アンネローゼ	兄さまの為なら、2、3日寝込んだって平気よ。	
311	イヴリン	何だ？ 一体どういうことだ？ あの二人は何の話をしてる？ 血？ 血をあげる？ ほかの仲間？ ……どうい、ことだ？ オルトヴィーンはあの男に一体何を……	語り
312	オルトヴィーン	……そこにいるのは誰だい？	
313	イヴリン	！ 気づかれた！ 俺は慌ててその場から逃げ出した。 ……どうしよう。 一体、どうしたら？ 姉さん、姉さん…… 姉さんの恋した男は、もしかしたら……っ！	語り 逃げ出すイヴリン
314	アンネローゼ	誰かに見られた？	
315	オルトヴィーン	かもしれない。 ……暗くて良く見えなかったけど、あの後ろ姿…イヴリン……？	
316	アンネローゼ	誰、それ？	
317	オルトヴィーン	ドロシアの弟だよ ……これはまずいことになったな	
318	アンネローゼ	ふふふ、そうかもしれないわね	楽しそうに

番号	キャラ名	台詞	ト書き
319	オルトヴィーン	アンネ、街を出る支度をしよう。	
320	アンネローゼ	ええ、そうしましょう。	
Scene16			
321	ドロシア	イヴ!!!!	家に飛び込んだイヴリン。 泣きそうな声で迎えるドロシア、イヴリンに抱き付く
322	イヴリン	ど…どうしたの姉さん、	姉の様子に吃驚
323	ドロシア	どうしたのじゃないでしょ?! どうして夜に一人で外になんて出たの?! 帰って来たら、あなたがいなかったからあたし、あたし…… ああ、もう、なんでみんな夜に出歩くの!	泣きそう、ややヒステリックになっている
324	イヴリン	みんな? みんなってどういうことさ?	
325	ドロシア	オルトヴィーンさんよお!!!! 彼に会っちゃった……夜に……どうしよう、どうしよう……もしあたしの仕事を知られたら、あたし……	泣きそう
326	イヴリン	一瞬姉さんも「あれ」を見たのかと思ったけれど、どうやら違うらしい。俺は正直ほっとしたけれど、同時に、俺にだって「仕事」のことを知られたくないはずなのにそんなこと言って良いのかな、なんて、妙に冷静に考えていた。	語り
327	ドロシア	もうやだぁ……明日どんな顔して会えばいいの……	泣きそう
328	イヴリン	……会わなきゃいいじゃん	静かに
329	イヴリン	そう、会わなければ良い。……会わないほうが、良い。あの男は、何か、……おかしい。 考えてみれば、最初から胡散臭い男だった。妙に羽振りが良くて、気さくで、……それでいて、イマイチ心の奥の読めない男。 どこに住んでいるのかすら分からない。 ……そしてさっき見た、あの出来事。足元に転がる干からびた男。オルトヴィーンは——……	語り
330	ドロシア	そ、…それは、やだ	
331	イヴリン	なんで 好きだから?	
332	ドロシア	!!	驚きと照れ
333	イヴリン	でも、会いたくないでしょ だったら会わなきゃいい。 第一、明日も来るかどうかなんて分からないじゃないか	
334	ドロシア	そ、そうだけど、でも…でも……	
335	イヴリン	……オルトヴィーンは、やめたほうがいいよ	できるだけ冷静に
336	ドロシア	え	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
337	イヴリン	多分、姉さんの恋は報われないよ	
338	ドロシア	な、なんでそんなこと言うの！ ベ、べつにわたしは……	動揺
339	イヴリン	とにかく、明日は会わないようにしなよ	
340	イヴリン	明日、……明日、俺がオルトヴィーンと話す。それで全部、終わらせてやる。姉さんが不幸になるかもしれないなんて、そんなの、駄目だから。	語り

Scene17

341	イヴリン	オルトヴィーン	街中。向こうから歩いてくるオルトヴィーンに声をかける
342	イヴリン	彼はやっぱりやってきた。黄金の巻き毛、青い瞳。妙に高級そうな服に、造り物みたいな顔立ち。いつも通りのいでたちで、いつも通り、姉さんに会いに来た。……でも今日は、会わせない。	語り
343	オルトヴィーン	おや、イヴリン また一人で来て……ドロシアに叱られるよ	
344	イヴリン	あんたに会いたかったんだ。姉さんには気づかれぬように気を付けてきた。……ちょっと話がある。良いか。	
345	オルトヴィーン	……ああ、うん。 良よ。	察する 二人、歩き出す……

Scene18

346	オルトヴィーン	ここは……教会？ といっても、ずいぶんと廃れているね	大きな廃教会へとやってきた二人
347	イヴリン	ああ。……十字架は、好きか？	扉を閉め、中に入る。 少し緊張気味に
348	オルトヴィーン	え？ ……別段好きとか嫌いとか、そういった感情はないけど	
349	イヴリン	ふうん……	
350	オルトヴィーン	……イヴリン。話って言うのは、昨日のことかな。	
351	イヴリン	……	無言の肯定
352	オルトヴィーン	単刀直入に言わないなんて君らしくないね ……やっぱりあそこにいたの、君だったんだ。	
353	イヴリン	……ああ、そうだよ。	ポケットから棍棒を取り出す
354	イヴリン	俺はコートのポケットから銀色の棍棒を取り出す。……棍棒を握っている手が震えているのに、どうか気づかれぬように。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
355	オルトヴィーン	おやおや、そんな物騒なものを……	
356	イヴリン	お前、一体なんなんだ…… 一体、昨日、あの男に何をした……？	声が恐怖で震えそうになるのを抑えながら
357	オルトヴィーン	そうだね……僕の大切な薔薇を穢そうとしたから、痛い目を見てもらっただけだよ。 ……イヴリン	オルトヴィーンの瞳が光る……
358	イヴリン	その時、オルトヴィーンの瞳がほのかに光を宿した。 昨晚見たのと同じ目だ…… 瞬間、俺の足はまるで地に張り付いたかのように、動かなくなってしまった。	語り
359	イヴリン	なっ…… っ く、くるな…！	ゆっくり歩み寄ってくるオルトヴィーンに怯える
360	オルトヴィーン	君は本当に健気だね ドロシアも健気だけれど、君も十分すぎるほど……本当に素敵な姉弟だと思う	歩み寄りながら
361	イヴリン	近寄るなって！！	強がっているが怯えている
362	オルトヴィーン	僕がドロシアに何かするかもしれないと思って、似合わないメイスまでもって……きっと恐怖を感じているだろうに、僕と二人きりになって……	イヴリンの頬に手を触れる
363	イヴリン	い、いやだ……触るなっ！	怖い
364	イヴリン	オルトヴィーンの手が俺の首筋に触れた。 その手はひどく冷たくて、……あの時、あの雨に濡れた日に感じた冷たさは、決して雨の所為ではなかったのだと知る。 背筋を、あの日感じたのとは明らかに違う冷たいものが走っていった。	語り
365	オルトヴィーン	安心をして、イヴリン。 僕は君たちに危害を加えるつもりは一切ないよ。 君が僕に危害を加えないのなら、だけど……	
366	イヴリン	……	
367	オルトヴィーン	僕はまだ死ぬわけにはいかないからね 君が僕に何かしようとしなければ、僕は何もしない。 でも、君が僕にメイスを振るいたくなる気持ちもよく分かるよ。 だから——……	
368	イヴリン	だ、だから？	怯え
369	イヴリン	オルトヴィーンが微笑んだ。 そして俺の耳元に唇を寄せて、そっと囁く。	語り
370	イヴリン	え………	メイスを取り落とす
371	オルトヴィーン	じゃあね、頼んだよ。	歩き出し、教会を出て行く
372	イヴリン	え……お、おい、待てよ……！ っ	膝をつく
373	イヴリン	オルトヴィーンは俺に背を向けて去っていった。 そうしてようやく、俺の足は動くようになった。足から力が抜けて、思わずその場に膝をついてしまう。	語り
374	イヴリン	……これを、姉さん、に……？	手にはとあるものが握られている……

番号	キャラ名	台詞	ト書き
375	イヴリン	俺の手には、棍棒のかわりに、先ほどオルトヴィーンから耳打ちと共に手渡されたものが握られていた。	語り
Scene19			
376	ドロシア	お花はいりませんか～ 綺麗なお花、たくさんありますよ～～～	街中で呼び込みするドロシア
377	イヴリン	……姉さん	ドロシアに近づくイヴリン
378	ドロシア	！ イヴ！ あんたまた杖もつかずに……！ ……あら、どうしたの、それ……	イヴリンが握っているものに気づく
379	イヴリン	オルトヴィーンが、姉さんに、って	差し出す
380	ドロシア	え……	
381	イヴリン	今日、街を出るんだってさ	
382	ドロシア	街を出る?! どうして?!	驚き、動揺
383	イヴリン	さあ、知らないよ ……とにかく、お別れのしるしにこれを、って。 直接渡せなくて、……あと、一緒に湖に行けなくてごめんって、言ってたよ。	
384	ドロシア	そんな……	花の入ったカゴを落とす
385	ドロシア	そんな……そんなあ……	泣き出してしまふ
386	イヴリン	姉さんの目から、涙が溢れだした。 ……姉さんは、何も知らない。 何も知らないまま、オルトヴィーンと別れる。 これで良い。 多分、これで良いんだ。 これが最善だったんだ。	語り
387	ドロシア	うう……っ ひっ……	泣いている
388	イヴリン	姉さん……	
389	ドロシア	もしかして、昨夜のせい？ 昨夜、会っちゃったから……あたしのこと知っちゃったから……だから……	泣いている
390	イヴリン	それは違う。 オルトヴィーンは言った。『君たちの幸福のために、僕は時を超えた先へ戻るよ』って。	
391	ドロシア	時を、超えた先……？	泣いている
392	イヴリン	うん、意味は俺もよく分からないけど……とにかく、彼は、……俺の願いを、叶えてくれたんだと思う。	
Scene20			

番号	キャラ名	台詞	ト書き
393	アンネローゼ	泣いていらっしやるけど、良いの？	遠くから姉弟を眺めている二人。
394	オルトヴィーン	ああ、うん。良いんだ。 会わないのも優しさだよ	
395	アンネローゼ	そう。 ……でも、勿体なかったわ。あの薔薇、ようやく花が開いたのにあげちゃうなんて	優しく
396	オルトヴィーン	約束していたからね。 やっぱ彼女は、薔薇の良く似合う子だよ。	
397	アンネローゼ	あの子の事、お気に入りだったのでしょうか？ それなのにどうして、お食事しなかったの？	
398	オルトヴィーン	あの二人は、時を超える必要がなかったからね。 彼女たちは自分の足で、未来を切り開いていける子たちだ。だから良いんだ。 ……さあ、次の街へ行こう。 どこがいい？ 東？ 西？	オルトヴィーンの腕に抱き付く
399	アンネローゼ	ふふふ、兄さまと一緒になら、どこへでも行くわ。 兄さまのお好きなように。	
400	オルトヴィーン	そうか。 それじゃあ——……	
END			